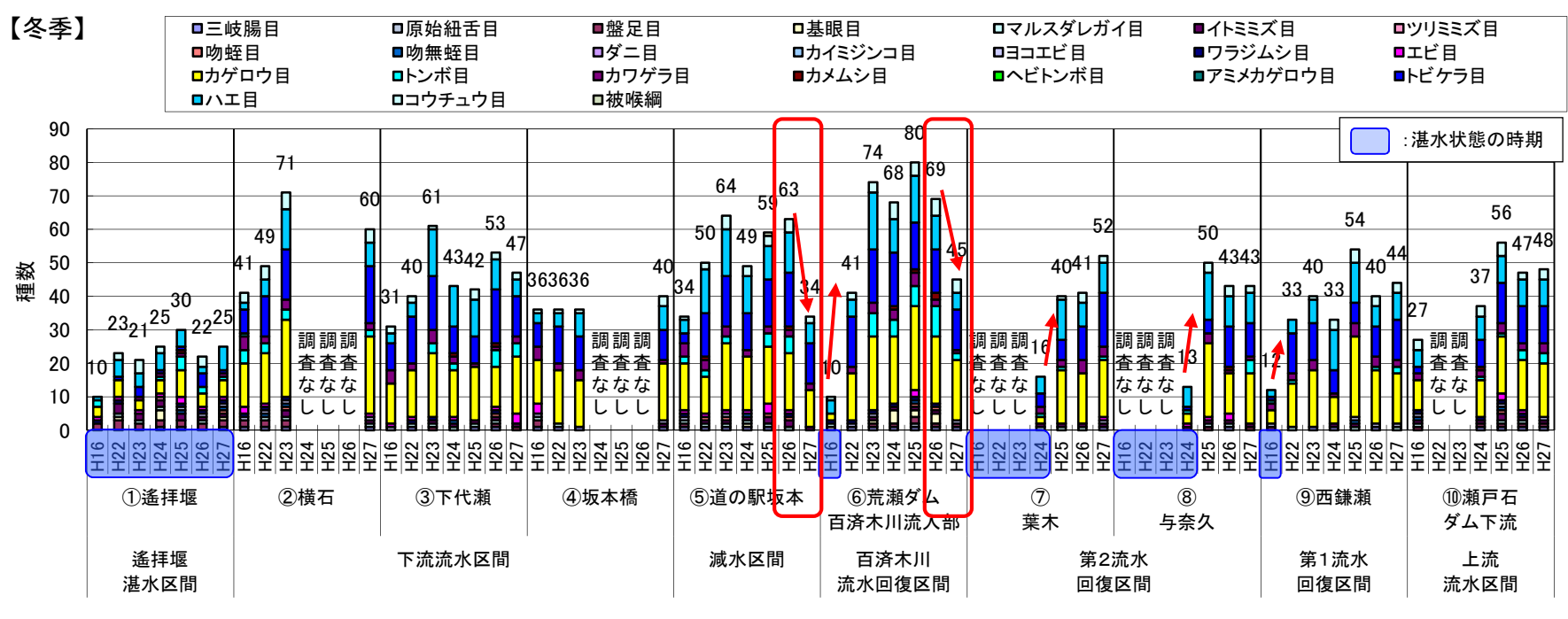
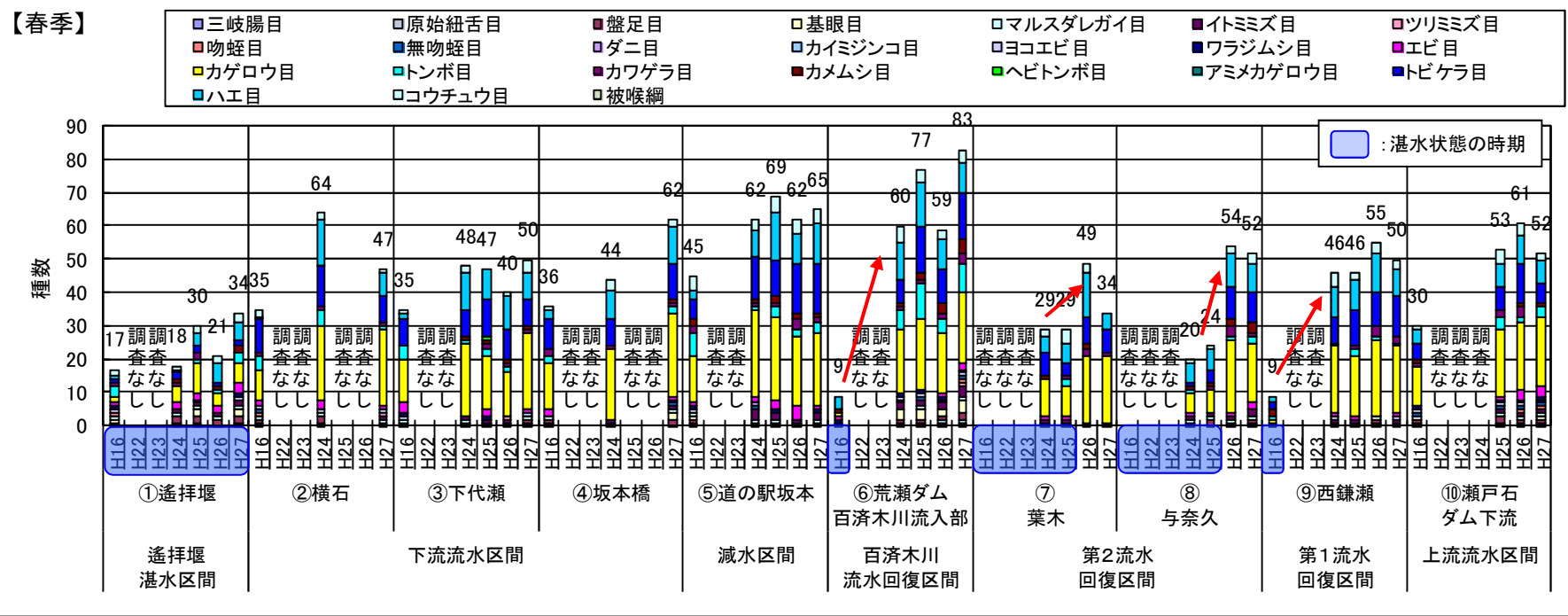
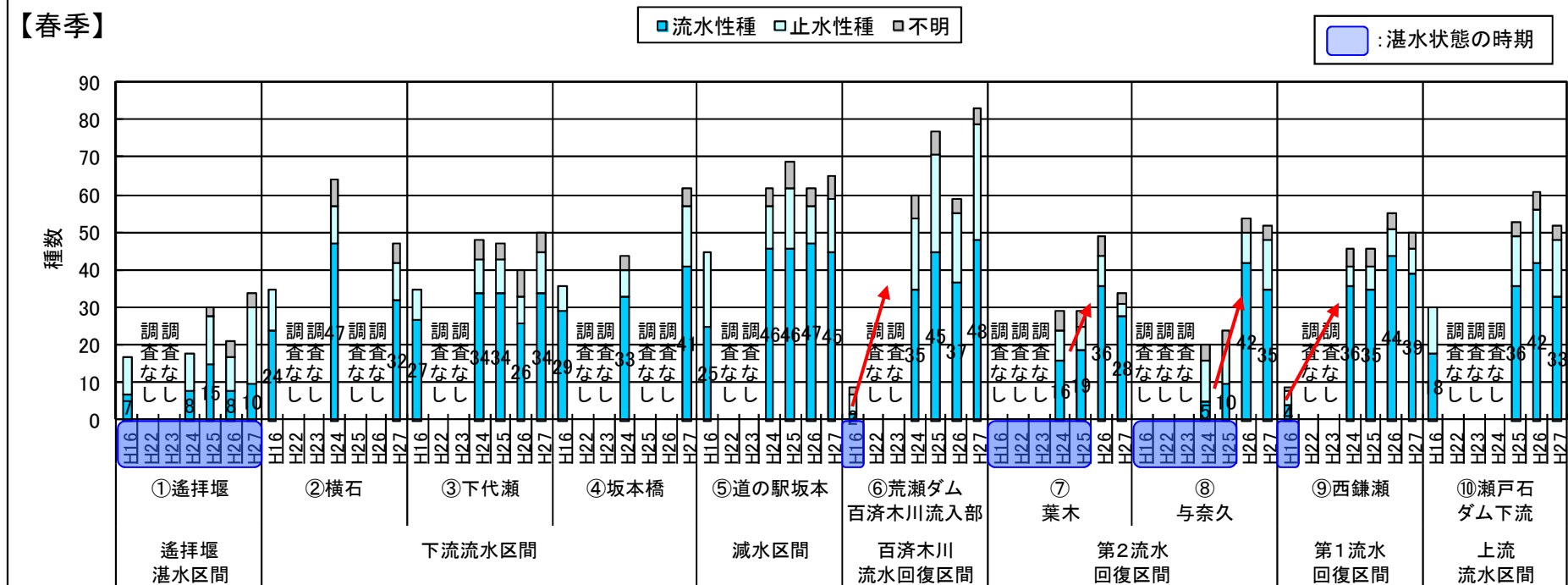


評価項目	視点	平成 27 年度の調査結果概要	評価概要
経年的な変化状況	全確認種数 流水性種の種数	- 流水回復区間では、流水環境への変化と同時に全種数及び流水性種が増加しており、平成 27 年度も概ねその状態を維持している。 - H26 年度から H27 年度の冬季に「④道の駅坂本」及び「⑤荒瀬ダム百済木川流入部」で種数の低下がみられた。	- 流水回復区間においては、それまでの湛水環境から流水環境へと変化したことで、瀬、淵、ワンド、水際の浅瀬等の多様なハビタットが形成され、それらの環境に対応した様々な種が増加することで全体的に種数が増加した。また、流水環境の増加に応じて流水性種も増加し、この状態が維持されている。 - 冬季の「⑤道の駅坂本」は、工事による影響でワンドがなくなり、生息環境の一部がなくなったことで種数が減少したと考えられる。また、「⑥荒瀬ダム百済木川流入部」についても、百済木川にみられたワンド等の生息環境が流水環境の変化とともになくなったため、種数が減少したと考えられる。

底生動物の全確認種数

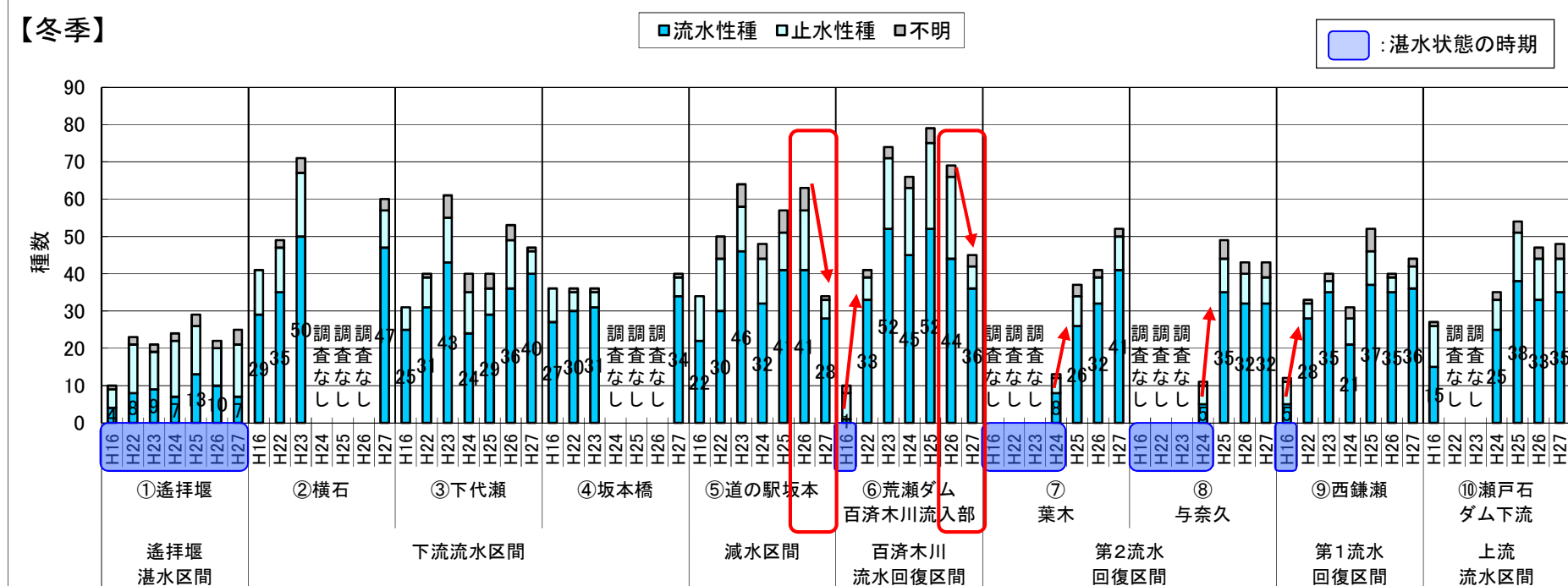


流水性種の種数



【用語の解説】

・流水性種と止水性種：流水性種は、河川の瀬を主な生息場とする種。止水性種は、湖沼や水田を主な生息場とする種。荒瀬ダムの撤去によってダム上流域の水位が低下し流速が増すと、流水性種が増加し、止水性種が減少すると考えられる。代表例として、流水性種ではカゲロウ目、カワゲラ目、トビケラ目の大部分の種が、止水性種ではマキガイ綱、ミミズ綱等に含まれる種が挙げられる。



流水性の代表種

